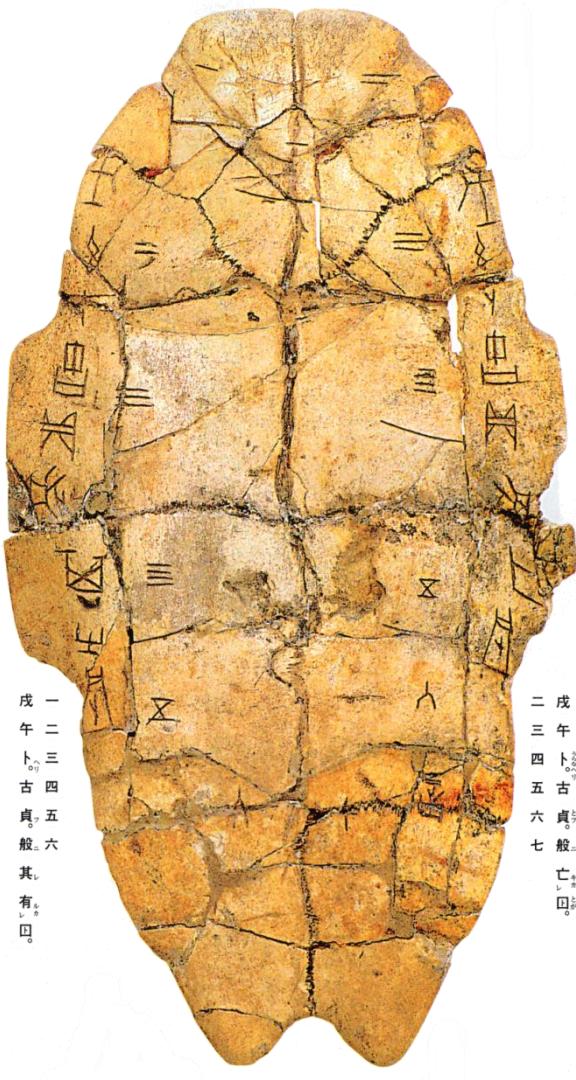


篆書 特別講座

『栃木の書壇五十人』展鑑賞の手引き



令和三年一月十日(日) 九時～十二時

宇都宮東市民活動センター 創作室

篆書・篆刻とは

三千数百年前、すでに漢字は、人間（為政者である王）が神と占ト（吉凶を占うこと）を通して交信する神聖なものとして存在していました。そのためなのか、漢字は、交信のツールとして両者が互いに理解しやすい具象的な形態という特徴を持っています。実際に神との交信とその記録保管に用いられたのは亀の甲羅や獸の骨でした。その表面には、墨書することもありますが、むしろ神命と呪能の永続化を図るために、鋭利な刀で刻みつけ、その凹みに朱を塗り込んだりもしました。

まもなく青銅の铸造技術が確立し、祭器として陶器から青銅器へ大きく転換すると、甲骨と違つて粘土状の鑄型には字形が丸みを帯びた銘文を残しました。また、この頃は祭祀の対象が祖先神に変わりつつあり、占文ではなく、氏族標章としての図象や簡単な器名からはじまってやがて作器の由来や子孫への伝言といった長い銘文を刻むようになります。

西周晚期から春秋戦国期（東周）にかけては、周王朝を天子と仰ぐ諸侯国の興亡と霸権争いが続きました。諸子百家が出現したのもこの頃ですが、それに呼応するかのように、各国の文字には装飾化や簡略化などによる独自性がみられるようになります。このことが結果的に、漢字の書体の多様化に拍車をかけていくことになりました。

しかし、それでも依然として、漢字はその原初の姿から秦時代の小篆に至るまで千年以上もの間、基本的な構造を変えずに、森羅万象を髣髴とさせるような「象形性」を綿々と保ち続けてきました。

一方、漢字が神の託宣を伝えていた殷時代より、西周を経て春秋・戦国時代に至ると、諸侯国のみまぐるしい興亡の中で、血族関係による封建制度から官僚制による君臣体制へと移行し、また、鉄器生産の大による穀物生産の向上や様々な産業の発達に伴い経済の流通が盛んになりました。このため権利や信用を表すための「古璽」と呼ばれる「印」が重要な役割を持つようになっていきました。

つまり、漢字がその神聖性を背景に、人間どうしの意思確認や伝達の手段にも使われるようになつたのです。これに用いた文字は、戦国期の「金文」から変化させ、印に巧く収めることに配慮した精緻な書体でした。

さらに、秦に至り印式が整うようになると、趣は更なる変化を遂げます。これが「秦印」で、字画は縦画、横画とも直線的で分間が等しく、田字形の界線を施した陰文（白文）という特徴を持っています。そしてさらに漢代に入ると秦印の風を発展させ、威厳と格調に満ちた「漢印」が登場するのです。

「漢印」では主に「印篆」と呼ばれる、字枠に点画を万遍なく満たすような端正な書体が用いられるようになりますが、この「漢印」が篆刻学習を進めていく上で規範とされています。一般的に、甲骨文からこの印に用いた書体までを総称して「篆書」と呼んでいます。

〔古璽 春秋戦国期〕

異耳

□屯□



〔大吉昌内〕



〔右馬廄将〕



〔漢委奴国王〕

〔秦〕

〔漢〕

漢代以降、次第に漢印に備わっていた風韻は失われましたが、宋代になると、古璽・漢印への復古の気運が出始めます。さらに元代に入つて彫りやすい石材が発見されると、文人の間で刻印をすることが広がりはじめ、明の文彭（あやまほう）（一四九八～一五七三）は広くその研究と啓蒙に努めました。文彭は今日の篆刻の開祖とも言われます。

「篆刻」とは、「篆書を刻すこと」ですが、私たちが篆刻を学ぶときは、単に刻す行為のみを指すのではなく、そのモチーフとなる「篆書」について学んだり、「印」が成立した中国の戦国時代（前四七五～前二三二）からその隆盛を迎える漢時代にかけての「印の歴史」を学び、さらに、それらを端緒として、後に金石学が盛んになり名人が輩出する明清時代の名品（印および書）に至るまでの様々な風韻に触れ、その中に秘められた理法を学びとることをも含んでいます。そう捉えることができれば、なぜ「篆書」にこだわるのかとも自ずから諒解されるはずなのです。



魏派「明 文彭」



徽派「明 何震」



浙派「清 丁敬」



鄧派「清 鄧石如」

藝龍堂松玩鶴

聽鶴深處

包氏某垞吟屋藏書記

有好都能累此生

実際、初めは自分の印を作ればそれでよいと思っていた人が、やがて漢字の歴史に興味が移つたり、さまざまな美しい石材や古銅印、さらには名人と呼ばれる篆刻家たちの印譜や書画の名品の蒐集に凝つてしまつたり、また、「篆書」という書体に魅力を覚え、刻することから篆書をモチーフに書作活動するごとに方向を転じることさえもあるのです。

自分の手による印ができるあがつたときの喜びは、それだけでひとしおなものがあります。もし、書道を習つていれば自分の作品に押す雅印となりますし、書道以外でも版画や水彩画の作品など、楽しみながら自由に使うことができます。また、藏書印や封緘印として使うことも可能です。

しかし、それだけに止まらず、好奇心をもつて学べば学ぶほど新たな発見が訪れる…：「篆刻」とはそんな奥の深い芸術なのです。

ただ、初めて篆刻をやってみようと思う段階では、一度に多くの事を吸収することは困難だと思います。まずはこの「篆刻」の世界に広がるさまざまな事象を広く眺め、徐々に興味・関心を膨らませるように臨むと良いでしょう。今回の講座では、初めて「篆刻」に挑戦しようとする人のための基本的な知識と技術を学ぶことが中心になります。

それでは、篆刻で扱う書体—篆書について、もう少し詳しく学んでみましょう。

篆書の種類

こうこつぶん

甲骨文



魚

甲骨文は、現存最古の漢字ですが、象形文字の他に、二つ以上の要素を組み合せて一字を構成した会意や、形声など複雑な文字も見られることがありますから、文字としてすでに発達したものと考えられています。

大篆
だいてん



小篆
しょうてん



まとめた字数をもつ現存最古の石刻は、戦国時代の秦で作られた石鼓文です。その文字は大篆で刻されていきます。大篆は、後に秦の始皇帝が統一をはかった小篆に先んずる書体で、字形は金文より整齊です。

戦国時代を征し、天下を統一した秦の始皇帝は、度量衡や文字を統一し、法令を国の隅々に行き渡らせて、中央集権制を確立しました。この時始皇帝が自國在来の文字を基準に統一した文字を、小篆といいます。

金文



殷とそれに続く周の王朝では、王室や国家の祭祀の儀式を行う際、供物に用いる器としてさまざまな青銅器が作られ、そこに文字が鋳込まれることがありました。それらの文字を金文といいます。

篆書の歴史

皆さん、漢字を使っている人が全世界でどれくらいいると思われますか。驚くことにその数は全世界の約四分の一近くになるだろうと言われています。その漢字の歴史は、現在わかっているだけでも、一九六五年に河北省石家庄市近郊で発見された、殷（商）時代中期（紀元前一五〇〇年頃）の陶器に刻まれた陶文にまで遡ります。これは、陶器を焼く前の粘土に細い棒や骨などで刻みつけた「刻画符号」と呼ばれる記号のようなもので、文字の萌芽を想起させるものです。その後、各地での発見に続いて、一八九九年、河南省安陽市の殷墟で、清の国子監祭酒（文部長官相当）であった王懿榮が竜骨と呼ばれていた骨に刻まれた殷時代の文字を発見しました。それは既に、文字創生よりかなりの時を経過したと思われる姿でした。

漢字は、原初、森羅万象を象形化することから文字としての生を受けました。例えば、「山」は「山」、「木」は「木」、「水」は「水」、「雨」は「雨」という具合です。当時人間は大自然に対して極めて小さい存在であり、自然の力、神の力に畏敬の念を強く抱かざるを得ない時代でした。そして、その神の意志を確認するために、神聖な生け贋として使われた亀の甲や獸の骨にこれらの文字を占文としてまたはその結果を記録するための文字として刻み付けられたのです。これが、甲骨文です。

- ① 甲骨文 : 亀の甲や獸の骨に占いの内容を刻んだもの。硬い骨を鋭利な刀で刻すので細く直線的。字は五~十mm程で極めて小さい。

さらに、青銅器の鋳造技術を獲得した後は、自分たちの氏族標章、製造主名、製造にいたる経緯、子孫へのメッセージなどをその器面に残しました。この銘文を金文といいます。

- ② 金文 : 青銅の祭器に鋳込んだ文字。粘土状の鋳型に刻むので甲骨文と較べ曲線や肥瘦が加わり、繁画も大らかな結構で表現が多彩で躍動感がある。

初期の金文は殷時代にみられます。甲骨文からは遅れはしたもの、前一世紀末に周の武王によつて紂（ちゆう）王が滅ぼされるまでの間に、それほどの期を違わずに発展し、使い分けをした時期もありました。大らかで躍動感があるのが特徴です。

婦好墓三連甗



彝鼎

唯八月初吉、王姜、易(賜) 旗 田三千待口、師麻 酷兄(貺)、用對王休、子々孫(々)、其永寶。

彝鼎

一九七二年に陝西省で発掘された。周王朝の本拠地で作られたもので、器自体も大きく、文字も非常に力強いいかめしい。



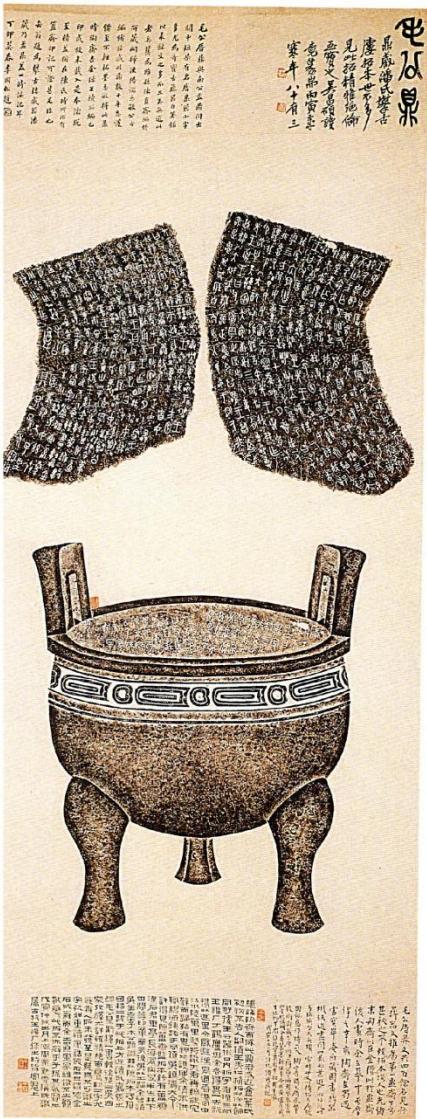
毛公鼎

墨スベシャル第九号「図説中国書道史」より

「毛公鼎」は、西周・宣王期の銘文、清末の道光年間に陝西岐山より出土。清末の金石家、陳介祺の手に入り、秘蔵され、その後転々とし、現在は台北の故宮博物院に蔵されている。三十二行、四百九十七字あり、これまで発見された青銅器の中で最も長文であり、西周金文の冠たるべき銘文である。「王若曰」から「永宝用」までやや縦長で、平正な結構の文字が整然と鋳刻されている。鼎の側面から底面の湾曲した部分に文字が刻されているために、拓本では全体の章法が変形して写されるが、これを平面に再現したら実に堂々たる銘文となるであろう。



王若曰、父曇、不顯文武、皇天弘
厥厥德、配我有周、膺受大命。率懷
不廷方、亡不閑于文武耿光。惟天將
集厥命、亦惟先正營辟厥辟、勞勤大命。



墨書体シリーズ 6 篆書百科より

「胡簋」は「胡器」とも称す。西周・康王期の作。一九七一年陝西省扶風県もり出土。直径百二十厘米。縱横に整然と布置され、安寧感のある成の文字書きがされている。堂々とした、やや大字の名作の一例である。

王曰、有余惟小子、余亡廉茲
夜、禋禋先王、用祀皇天。黃

魯恭民、尚獻于宗室家

獻作饗尊寶殿、用敬惠朕

皇文列祖考、其格前人、

其廟在蒼廷帝降、山廟望

上帝大角命、川廟保我族

立懿身、懿宗陰谷多福、坐車

宇昌造廟、獻萬年、鑿美

狀多豐、用奉矣、匱

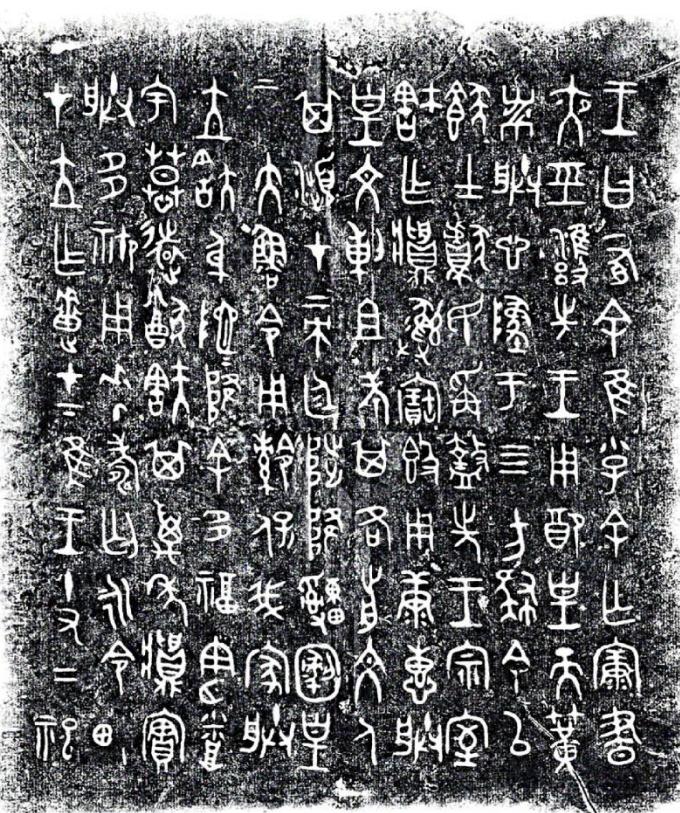
在位、作樂在下、惟王子有二祀



中山王饗方壺

「中山王饗方壺」は、戦国時代中期の中山國の銅器である。中山国が燕との戰に参与、大勝し、蒸銅器を用いて方壺を作り、戰功を記した。鉛文は鋸削ではなく、刻さでいる。筆で下書きをした上に刻したのであろうか。

墨書き



戰国中期(前314年) 35.5×19cm

：任之邦。是以遊夕飲飮罔有違
惕。賈竭志尽忠、以左右厥辟、不
式其心。受任佐邦、夙夜匪
懈進賢措能、亡有譁息。
以明辟光。適遭燕君子

增不顧大義、不求諸侯、
而臣主易位。以肉絕昭
公之業、乏其先王之祭祀、
外之則將使上觀於天子之廟、
而退与諸侯齒長於会同。則上：

墨書きシリーズ 6 篆書百科より



封建制下、王からの恩賜として受けられる金（銅のこと）をもとに、名譽と権威の象徴の性格を持つ青銅祭器は製造され、その榮誉を永く子孫に伝え、繁栄を祈るために金文は鋳込まれます。この文字形態は、次の周が独自の文字を持たなかつたためにそのまま受け継がれ、さらに、高度な鋳造技術を持つた殷の工

く渤海が続々と滅ぼされ、次第に完成度が高まっていきました。しかし、約七九〇年もの長きにわたる周王朝も紀元前八世紀頃になると勢力が衰え、諸国からの蜂起のですが、この時期は、漢字の書体が様々に変化し、小国ごとに使用する文字の姿が異なるという混乱を感じました。「楚」や「中山王国」などの特徴的な文字がみられるのもこの時期です。

やがて、「秦」は、始皇帝によつて全国の統一を成し遂げると、自國で使用していた文字を規範にして全国の文字を統一させました。それまで「秦」で使われていたのが、『籀文（ちゅうぶん）』と呼ばれる書体で、その代表例として「石鼓文」がよく知られています。

自国の文字を活かして他国の書体を廢することは、皇帝の意志を徹底させたり、諸国間の情報伝達上の障害を抑えるだけでなく、他国の文化を廢するという統治政策とも合致していたのでしよう。こうしてできたのが、「小篆」です。



楚王今世圖



石鼓文（戰國中期—後期）



石鼓文(北京·故宫博物院)

③ 小篆：始皇帝が丞相李斯に命じて制定させた書体。縦長で左右対称を基調とする。改良のものである籀文は小篆に対して大篆と呼ぶ。



泰山刻石 (BC二一九)

後編

このようにして、漢字はその体に精靈を宿し人間と神の意志を結ぶ神聖なる象形文字として生を受け、その性格を維持しつつも幾度かの変遷を経て、『小篆』という始皇帝の威厳を誇示するかのような装飾性の強い形態に收まりました。これは、金文に比べて象形性はかなり失われ、やや無機的な姿に変わりましたが、漢字の変遷を学ぶうえではとても重要な書体となっています。

篆書と篆刻との関係

さて、『小篆』は、威風壯麗である反面、実用性には欠けたため春秋戦国期には既に通用していた早期の「隸書」や「行・草書」、「楷書」が台頭し、通用体になることはありませんでした。しかし、「印」の世界では、現在に至つてもなお、簡単なもの除去しては、厳然として篆書が尊重されているのです。「隸刻」や「楷刻」でなく、「篆刻」でなければならぬということは、そもそも篆書は神との契約に用いられた当時の姿を留めていること、方寸の美的表現に対応させる工夫を重ねてきたという歴史を持つているからで、古璽の字体や漢印の印篆などもその過程で生まれたものなのです。

さて、この篆書の優れた造形性は、墨による書表現の世界にも新展開を見せていました。近年の各書展には、金文や小篆をモチーフに、自由で大胆な作品が数多く見られるようになりました。三千年もの前の古代人の感性が産み出した造形は、現代にも立派に息づき、かつ書作家のロマンをかき立てる魅力を放ち続いているのです。

同様のことは、篆刻の作品にも当てはまります。しかし、篆刻では、字形の面白さだけで字形を組み合わせることを厳に戒めています。例えば小篆と金文を組み合わせるということは許されませんし、金文に限つても同時期のものに合わせなければなりません。(ひとくちに金文と言つても数多くの種類を総じて言つてゐるのです) また、組み合わせ上、むやみに筆画を増減・変形させることも誤字となる危険が伴います。篆刻では、方寸という限られた空間に、文字構造上の字源に基づく制約の範囲内においてのみ、篆書が持つ豊かな造形性が駆使できるのです。このことは、一朝一夕には習得できないなかなか厄介な壁ですが、学習の先の目標としては是非、心に留めておきたいことです。

【篆書崔子玉坐右銘四屏】部分



崔子玉坐右銘。冉道人之書。冉說己之長。雅人重勿忘。愛瓶瓶。



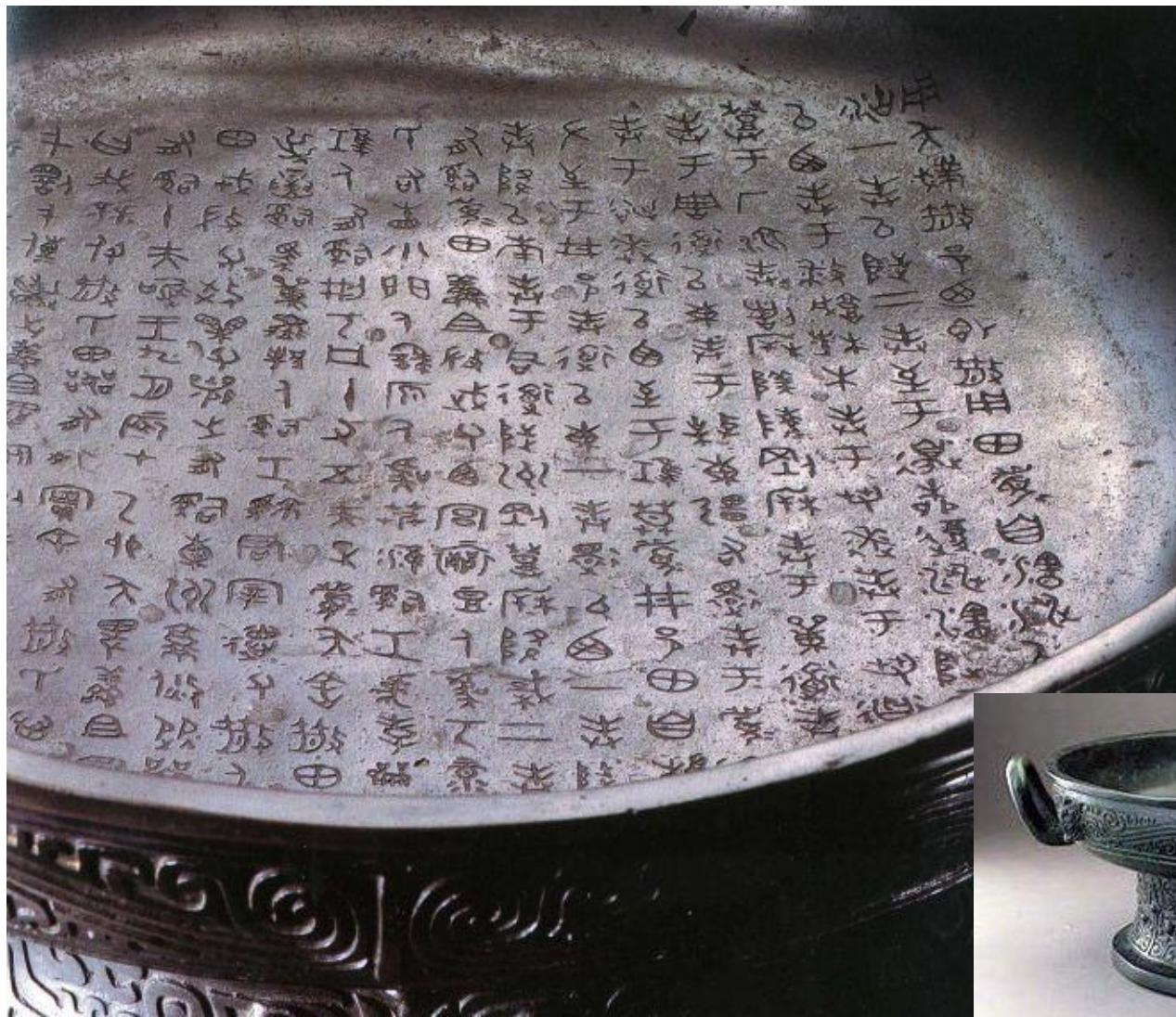
勿忘。甘譽不足慕。唯「為紀禪。隱心而後動。芳誠庸尚德。冉。冉名過實。」



【觀海者難為水】

散盤（散氏盤・矢盤）

中国、西周後期の一九行三五〇字の銘文を有する盛水用銅器。口径 50.5 cm、高さ 20.5 cm で、虺龍文や饕餮文が施され、銘文には矢の国と散の国の境界に関する契約が記されている。前半には土地の調査実況、後半にはその調査に参与した人名と矢国の人への誓いの言葉が、力強い線で書かれている。





用矢鑄散邑、迺卽散用田眉（壠）。自濱涉、呂（以）南、至于大沽、一封。呂（以）陟、
二封。至于邊柳、復涉濱、陟事、戲鑿陝、呂（以）西、封于敵城搖木、封于芻速、封于
芻道、內陟芻、登于厓濱、封都枅、陝陵、剛枅、封于臘道、封于原道、封于周道、呂（以）
東、封于厓東彊、右還、封于眉道、呂（以）南、封于谷速道、呂（以）西、至于唯莫。
眉、井邑田、自根木道、左至于井邑封道、呂（以）東、一封、還、呂（以）西、一封、
陟剛、三封、降、呂（以）南、封于同道、陟州剛、登枅、降棫、二封。矢人有銅、眉田
鮮、且、斂、武父、西宮襄、豆人虞兮、彖貞、師氏右眚、小門人繇、原人虞芳、淮、銅
工虎孝、開豐父、唯人有銅蒞、瓦、凡十又五夫、正眉矢舍散田。銅土貢寅、銅馬臘魚、
覩人銅工驥君、宰德父、散人小子眉田戎、斂父、效果父、襄之有銅橐、州貢、焚從鬻、
凡散有銅十夫。唯王九月、辰才乙卯、矢、卑鮮、且、舞旅誓曰、我旣付散氏田器、有爽
實、余有散氏心賊、劓（則）爰千罰千、傳棄之、鮮、且、舞旅、劓（則）誓。迺卑西宮
襄、武父誓曰、我旣付散氏濕田牆田、余又爽變、爰千罰千、西宮襄、武父、劓（則）誓。
厥為圖矢王于豆新宮東廷、厥左執綬、史正中農

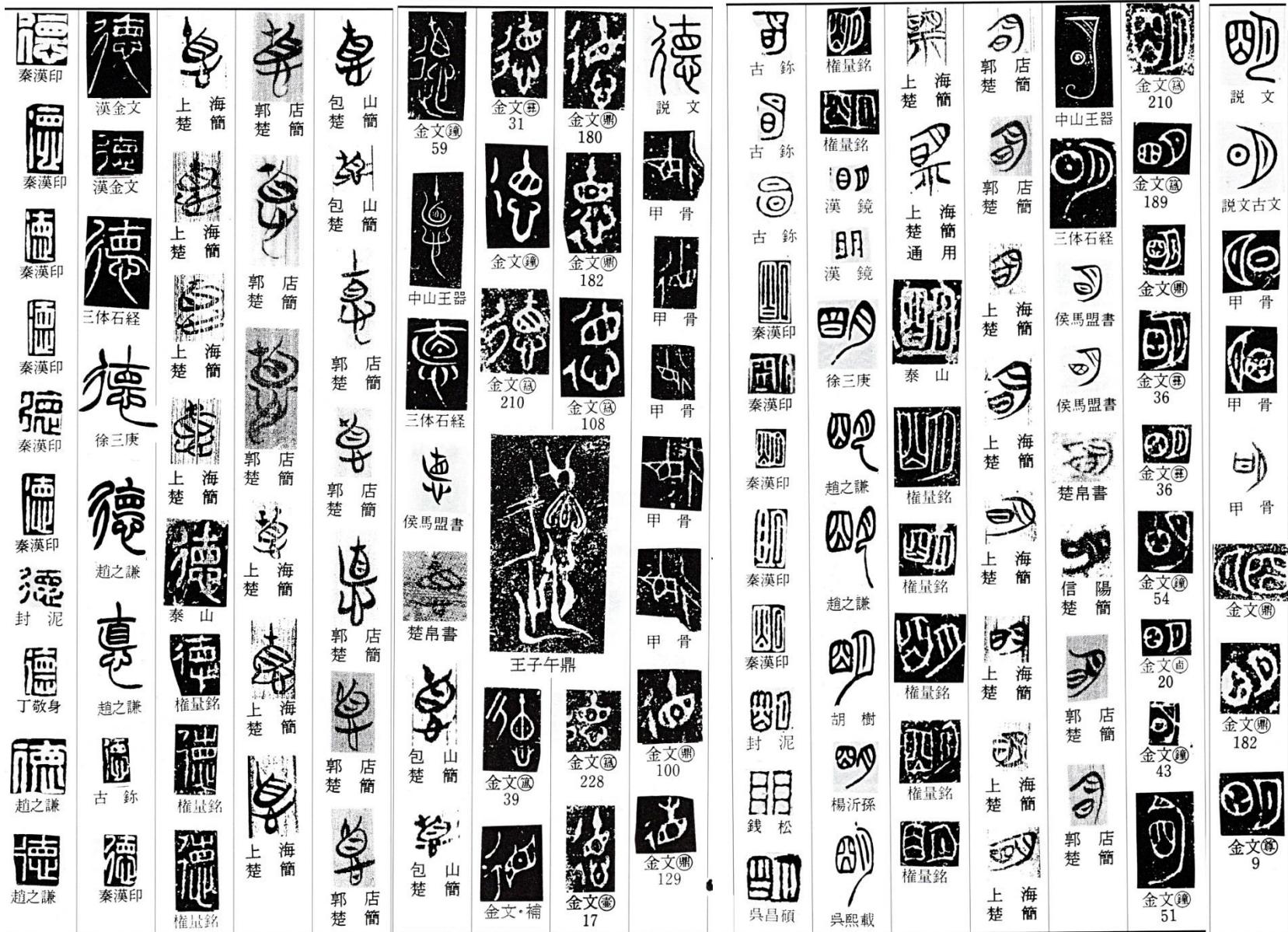
小篆を習う（小林斗盦篆書千字文）



小林斗盦「篆書千字文」の集字による「明徳」

明徳

明徳」を篆書で書く



篆書に関する字書の例

